Publisher's Review
パブリッシャーズ・レビュー
●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●

msz みすず書房の本棚
No. 1　2011 冬　（価格は消費税込です）
113-0033 東京都文京区本郷5-32-21　tel. 03-3814-0131　http://www.msz.co.jp

二つの全体主義に抗して

赤尾光春

ワシーリー・グロスマンの『人生と運命』は作品の運命そのものが一つの物語である。

作家は一九六〇年に畢生の大作を完成させるが、ほどなくしてKGBの家宅捜索を受け、原稿はその写しと創作ノートとともにインクリボンごと「逮捕」された。グロスマンはフルシチョフに原稿の返却を訴えるが返答は得られず、代わりに国家イデオロギー担当官のスースロフから呼び出しを受け、敵の原子爆弾の脅威をさらに増すようなこの作品が「二、三〇〇年以内に出版されることはありえない」と宣告された。失意のグロスマンは一九六四年に没した。

だが、スースロフの「予言」は外れた。グロスマンの死後、友人に託されていた原稿の写しがサハロフ博士らの尽力でマイクロフィルムに収められて国外に秘かに持ち出され、一九八〇年にスイスで出版された（仏訳は八三年、英訳は八六年）。作家の「祖国」でようやく日の目を見たのは一九八八年、ソ連崩壊のわずか三年前のことだった。

独ソ戦と収容所の時代

『人生と運命』は、第二次世界大戦の帰趨を決したスターリングラード攻防戦の時代を壮大なスケールで描いた一大叙事詩であり、しばしばトルストイの『戦争と平和』と比較される。ナチスの絶滅収容所から廃墟と化したスターリングラードへ、ウクライナの死のゲットーから市民の疎開先カザンへ、ロシア最南端のステップから極北の強制収容所へと、小説の舞台は目まぐるしく変わる。古参革命家未亡人アレクサンドラ・シャーポシニコワの親類縁者を軸に展開する物語には、歴史上の人物から名も無き兵士まで総勢五〇〇人以上が登場する。戦火で散り散りになった家族、不信と敵意から孤立感を深める人々の脳裏をかすめる思考や苦悩はひたすら断片的に描かれ、救いのない無数の人生と運命は史上最大の戦争によって一つに結びつく。

だが、真の戦いは、総力戦を遂行する国家体制との生死を賭けた闘いにある。捕虜となった古参ボリシェヴィキのモストフスコイは、ゲシュタポの収容所長官が語った言葉に拷問以上に苛まれる。「われわれの勝利は、あなた方の勝利なのです。……もしあなた方が勝利すれば、われわれは滅びることになります。そして、あなた方の勝利の中に生きることになります。」ナチズムとスターリニズムとが瓜二つの体制であるというイメージを随所で喚起するこの作品は、二〇世紀が生んだ全体主義社会の比類なき解剖図でもある。

グロスマンの眼差しはしかし、完全無欠に近い体制下でも消尽されない人間性の発露も見逃さない。それは、前線兵士の並外れた勇気であったり、命がけで脱走兵を匿い、ユダヤ人に手を差し伸べる個人の善意であったりする。グロスマンは、いかなる見返りも求めない盲目的な「善良さ」を、集団的殺戮をも厭わない大きな恐ろしい「善」よりも上位に置いた。かくて、権力のメカニズムに対する冷徹な観察眼に自由への渇望を捉える鋭敏な嗅覚が加わり、陰鬱な小説に一筋の光が差し込む。

封印されたユダヤ人の苦難

『人生と運命』が二〇世紀思想に与えた影響は計り知れない。『ル・モンド』が「二〇世紀の最も偉大なロシア小説」と評したこの作品を、哲学者のレヴィナスは最も影響を受けた二〇世紀の小説に挙げ、歴史家のトニー・ジャットは「二〇世紀ヨーロッパの十冊」に選んだ。全体主義と闘った知識人の筆頭にグロスマンの名を挙げたのは、文芸批評家のツヴェタン・トドロフである。

しかし、本国ロシアでの評価は微妙である。この小説は、ナチスのユダヤ人虐殺だけでなく、独ソ戦の勃発とともにソ連社会に再浮上した反ユダヤ主義をも主題とする。出自にも関連して毀誉褒貶に翻弄される核物理学者のヴィクトル・シュトルーム（アレクサンドラの娘婿）は作者の分身である。シュトルームの母親は、故郷ベルディーチェフで二万人のユダヤ人とともに虐殺されたグロスマンの実母をモデルにし、ゲットーから息子に宛てて綴られた母の手紙は最も感動的な場面の一つである。『人生と運命』はそれゆえ、ソ連ユダヤ人を襲った受難の記念碑であると同時に、亡き母に捧げられたグロスマンの私的な挽歌でもある。

一方、戦後のソ連社会では「ユダヤ人問題」は最大のタブーの一つとなり、ホロコーストがそれに相応しい扱いを受けることはなかった。「大祖国戦争」で苦しんだのはユダヤ人だけでない、ユダヤ人の受難をことさらに強調するのはゆるしがたい、というわけだ。ソ連崩壊後の状況もさほど変わらない。多くのロシア人にとってホロコーストは他人事であるばかりか、ロシア文化を破壊したボリシェヴィキ革命をユダヤ人の陰謀とみなす者は後を絶たない。「ユダヤ人問題」が喉元に刺さった棘であり続ける限り、ロシアで『人生と運命』が正当な評価を得ることも、グロスマンが「国民的作家」として記憶されることもないだろう。

それにしても、これほど重要な作品がなぜ今まで日本語に翻訳されなかったのだろうか。フルシチョフの「雪どけ」から一九七〇年代にかけて、ソ連の発禁本は日本でも軒並み刊行され、グロスマンの『万物は流転する……』も一九七二年に日本語訳が出ている。翻訳の時機を逸したのは、『人生と運命』が西側で刊行された八〇年代がロシア文学受容の低迷期だったことも関係しているだろう。またペレストロイカ以降には発禁本や新刊本が続々と刊行されたものの、日本のロシア文学界は話題作や新作の翻訳に余念がなく、『人生と運命』が刊行される目途は一向に立たなかった。

日本語にして一五〇〇頁近くにもなる大著を訳された齋藤紘一さんは、大学で米川哲夫氏にロシア語の手ほどきをうけたあと、独学で研鑽を積まれてきた方である。これで作家ワシーリー・グロスマンの名がようやく日本でも広く知れわたることになろう。訳者の情熱と力量に心からの敬意を表したい。（あかお・みつはる　大阪大学・ユダヤ文化研究）

「200年、発表不可。」戦後ロシア文学の最高峰

ワシーリー・グロスマン
≪人生と運命　全3巻≫
齋藤紘一訳

史上最大の激闘、スターリングラード攻防戦を舞台に、物理学者一家をめぐって展開する叙事詩的歴史小説。

兵士・科学者・農民・捕虜・聖職者などの架空人物、ヒトラー、スターリン、独軍・赤軍の将校、アイヒマンなどの実在人物が混ざりあい、ひとつの時代が圧倒的迫力で文学世界に再現される。戦争・収容所・密告――スターリン体制下、恐怖が社会生活を支配するとき、人間の自由や優しさや善良さとは何なのか。ソ連時代、「最も危険」とされた本書は、現代史の稀有な証言でもある。

作者グロスマンは独ソ戦中、従軍記者として全土に名を馳せつつ、トレブリンカ絶滅収容所を取材、ホロコーストの実態を世界で最初に報道した。一方で、故郷ウクライナの町で起きた独軍占領下最初のユダヤ人大虐殺により母を失う。戦後にはユダヤ系文学者として名指しで批判される。原稿を抹殺されながら本作品が「復活」したのは、彼が事前に友人二人にタイプ原稿と草稿を個別に（他方の存在は告げずに）託していたからだった。

グロスマン（右）

全体はトルストイ『戦争と平和』のスケール、各章はチェーホフの繊細な短篇のよう。「二十世紀ロシア文学の傑作はブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』と『人生と運命』」（亀山郁夫氏）。哲学・思想面からも未来の読者を待っている。

【第一巻は一月中旬刊、第二巻二月、第三巻三月刊】［海外文学・現代史］
（四六判①512頁・予価四五一五円　②480頁③432頁・予価各四七二五円）

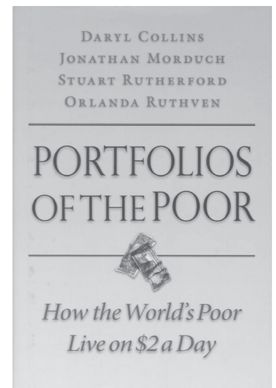
▼パブリッシャーズ・レビュー創刊
ご案内を次面に掲載しています。

貧困層のやりくりダイアリー

ジョナサン・モーダック　スチュアート・ラザフォード
ダリル・コリンズ　オーランダ・ラトフェン

≪最底辺のポートフォリオ　1日2ドルで暮らすということ≫

野上裕生監修・大川修二訳



世界の貧困層の所得＝1日2ドルでいったい何ができるだろうか？　2ドルを単純に市場為替レートで換算すれば日本円で154円、インドルピーで104ルピー。物価の違いを考慮すると、104ルピーは日本円で780円ほどだ。つまり月収23400円也。これでどうやって暮らすというのか……。

さらに苦難はこればかりじゃない。2ドルというのは、ならせば2ドルというにすぎない。まったく金のない日もあれば、まとまって金の入る日もある。月収23000円ほどの人が、ひもじい3か月のあとに7万円を手にしたらいったいどうするだろうか？

本書は、先進国では想像もつかない、貧困層の生活のやりくりを、丁寧な聴き取りによる「ダイアリー調査」であきらかにしている。そこから見えてきたのは、貧しいからこそ、きわめて洗練された金融ツールを実に巧みに組み合わせ、リスクをなんとかヘッジしようとする人々の姿だった。バングラディシュの首都ダッカでは、マイクロファイナンスから借りたお金を、わざわざ近所の住人にマタ貸しする夫婦。インドのデリーでは、高利の借金をして金のネックレスを買う女性。南アフリカでは、葬儀費用を毎月積み立てる大家族……。少額、不定期、手段がないという三重苦のなかで、まさにその状況だからこそ、賢明かつ懸命に金融手法を駆使する途上国の貧困層の実態を、詳細な調査で明らかにする初の書。

【十二月下旬刊】
[経済・国際協力・国際関係]
(四六判・352頁・三九九〇円)

現代精神医学の普遍幻想をゆさぶる

アーサー・クラインマン
江口重幸他訳
≪精神医学を再考する≫

本書は医療人類学を代表する頭脳であるクラインマンが長年の研究の精髄を提示した、現代の古典である。

各章は、精神医学の現状に向けて提起された基本命題のそれぞれを考察している。曰く「精神医学的診断とはなんだろうか？」「社会的関係と文化的意味は、精神疾患の発症と経過に影響を与えるか？」「専門家の価値観は精神科医の仕事にどのように影響を与えるのか？」「精神科医はどのように癒すのか？」等々。こうした学問分野の根幹に関して十分な客観性と内省を維持するためには、西欧的精神医学の枠組みの〈外側〉にある非西欧の枠組みと知見に照らして、不可視のドグマをあぶりだす営みが必要なのだ。クラインマンはまさにそうしたデータの地道な検討と臨床での実践を使命としてきた。そして本書で、基本命題への練り上げられた回答を自ら示すという形で、研究の成果を凝縮して読者に伝えようとしている。

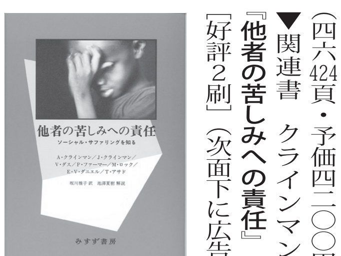
「精神科医を含む多くの臨床家は、いかなるルートをたどろうとも、その臨床家の生涯の途中でこの「文化的な知識」が圧倒的にものをいう地点（難所）を通ることになるのだと思う。それを強く自覚するかどうかが、その後の各人の登攀ルートの分かれ道になるのではないか……今日、生物学的精神医学が全盛の時に、最も必要となるのがこうした視点なのである。」

（「訳者あとがき」より）

精神医療に携わるすべての人へ贈る基本書。【一月中旬刊】

[精神医学・文化人類学]
(四六424頁・予価四二〇〇円)

▼関連書　クラインマン他『**他者の苦しみへの責任**』[好評2刷]（次面下に広告）



人間の善と自然世界を関係づける

ジョン・オニール
金谷佳一訳
≪エコロジーの政策と政治≫

「政治はその構成員の善い生活をめざすべきであり、また善い生活とは何かという議論を含むべきであるとされる理由は、政治が寛容の徳と両立可能であるだけでなく、まさに寛容を促進させるからである」。

人間の幸福（善）を、人間が所有する潜在能力（連帯意識、美の観照、よりよい暮らしの創造など）の発達と捉えるアリストテレスの概念を引き継ぎ、非人間的自然世界や将来世代と、私たち自身の幸福を関係づける市民社会を構想する好著。

「科学と芸術は、非人間的世界の多様な性質に、利害にとらわれずに応答する能力を発展させ、われわれの感覚を人間化する」。

善の理念は、個人の欲求や選好のたんなる集積ではない。欲求を消費財に結びつける新古典派経済学の費用便益分析も、科学技術を拒絶する環境主義も共に退け、マルクスからフランクフルト学派、ロールズやウォルツァーなどの社会理論、ハイエクやセンなどの市場理論を批判的に継承しながら、福祉と公正に根ざしたエコロジーを探る。

[環境・倫理・思想]
(四六判・344頁・三九九〇円)

シリーズ≪エコロジーの思想≫完結

オニール『エコロジーの政策と政治』をもってシリーズ完結いたします。

人間は自然世界をどのように見つめ、そして働きかけてきたのか。地球温暖化、資源の枯渇、生物種の絶滅、途上国の貧困化と人口増大——今日の環境危機に対して、現代の思想家は何を説き、いかに実践しているのか。自然と生命の価値を尊重し、持続可能な社会を実現するために、人類共通の指針となるべき≪エコロジーの思想≫が、ここにある。

J・A・パルマー編『**環境の思想家たち**』上下　須藤自由児訳

先哲に学ぶ環境思想への手引き。仏陀、荘子、芭蕉、ガンディー、カーソンほか50人。(四六判・上312頁・二九四〇円／下328頁・二九四〇円)

K・マイヤー＝アービッヒ『**自然との和解への道**』上下　山内廣隆訳

環境先進国ドイツの環境哲学を紹介する初めての本。歴史と未来に及ぶ思索の成果。(四六判・上304頁・二九四〇円／下296頁・二九四〇円)

J・B・キャリコット『**地球の洞察**』山内友三郎・村上弥生監訳

東洋宗教から先住民の自然観まで。多文化時代の環境哲学。(四六判568頁・六九三〇円)

アンゲーリカ・クレプス『**自然倫理学**』加藤泰史・高畑祐人訳

自然の価値に対する道徳的関心を探る。原理倫理学の試み。(四六判312頁・三五七〇円)

「貧困の本質を教えてくれる洞察に満ちた本」（アマルティア・セン）

エスター・デュフロ　アビジット・バナジー

≪貧乏人の経済学　貧困対策をもういちど根っこから考える≫

山形浩生訳

なぜいまだに貧困問題は解決しないのだろうか？　援助は有効に機能しているのだろうか？　それとも市場に任せることで、問題の多くは解けてしまうのだろうか？　従来の、援助vs市場、上からの制度vs下からの自助、といったイデオロギッシュな対立をこえて、貧困にまつわる問題を丁寧に切り分け、その効果を厳密に計測し、そこからこれまでの論争に終止符を打つ解決策を具体的に着実に示す。

インド、オリッサ州。明日の食事にも事欠く貧農が大きな病にかかる。同じ村には国営の診療所があるにもかかわらず、彼は資格をもたない「ベンガル医者」にかかる。病は重くなるのに……なぜだろうか？　ザンビアの貧しい村。水道がひかれていない村で、生水による下痢を防ぐには、塩素による消毒が一番。しかも費用が安い。しかしNGOが、もともと安価な塩素剤を通常の4割引で販売したところ、購入した世帯はたったの4割だった。なぜだろうか？

ランダム化試験の旗手がミクロなイッシューへの答えを統合して、貧困問題解決への地に足のついた道を示したはじめての書。【一月下旬刊】

目次　もう一度考え直そう、もう一度／10億人が飢えている？／お手軽に（世界の）健康を増進？／クラスで一番／パク・スダルノの大家族／はだしのファンドマネージャ／カブールから来た男とインドの宦官たち：貧乏人融資のやさしい（わけではない）経済学／網羅的な結論にかえて

「二人の傑出したリサーチャーが貧困の本質を教えてくれる洞察に満ちた本」（A・セン）

[経済・国際関係・国際協力]
(四六384頁・予価三一五〇円)

『パブリッシャーズ・レビュー』のご案内

PR紙『パブリッシャーズ・レビュー』を創刊しました。
東京大学出版会 http://www.utp.or.jp（5・11月）
白水社 http://www.hakusuisha.co.jp（1・4・7・10月）
みすず書房 http://www.msz.co.jp（3・6・9・12月）
が、各月15日に発行いたします。
『パブリッシャーズ・レビュー　みすず書房の本棚』では、これまで出版梓会が発行してきた『出版ダイジェスト』みすず書房特集版（終刊）に代わり、近刊・新刊書の詳しい内容紹介記事を中心に、いっそう紙面の充実を図ってまいります。新たに送付をご希望の方は、小社のウェブサイトでもお申し込みいただけます。
（『パブリッシャーズ・レビュー　東京大学出版会の本棚』『パブリッシャーズ・レビュー　白水社の本棚』のご希望は、それぞれの社でお受けいたします。お手数ですが、発行の社ごとに、上記サイトよりお申し込みください。）

みすず書房新刊（2011・1〜12）1

東京・文京・本郷5
TEL〇三‐三八一四‐〇一三一
（価格は税込です）

本年1月以来、一年間の新刊書を刊行順に一覧にいたしました（以下、五面下まで続きます）。復刊書は、四面下から五面下にかけて掲載しています。最新刊につきましては、本紙今号掲載の詳しい紹介記事をごらんください。

[一月]

〈大人の本棚〉
短篇で読むシチリア
武谷なおみ編訳　エトナ火山とマフィアの島から生まれた奇妙な味の文学。第一人者が、百年の十四篇を精選して初紹介。**二九四〇円**

歴史家の羅針盤
山内昌之　不安と危機の二語がまとわりつく今日の世界。その多面的理解のために学ぶべき著作は何処に？　最新書評集。**二九四〇円**

スピノザの方法
國分功一郎　『知性改善論』『エチカ』冒頭定理を精読。気鋭の哲学者が放つ類書なき論考、「平行論」の新たな地平。[4刷]　**五六七〇円**

自己変革するDNA
太田邦史　DNAは環境に応じて自らを書き換える。DNA配列の後天的変化と、生物の多様化戦略。画期的概念の創出。**二九四〇円**

〈大人の本棚〉
天文屋渡世
石田五郎　文学と芸能と山を愛し、そこに現れた星々の魅力を飄々と綴る。『天文台日記』の著者の全貌を伝えるエッセイ。**二九四〇円**

東アジア人文書100
20世紀の東アジアではどんな本が読まれたか。中国語圏・韓国・日本の編集者が選ぶ画期的案内。東アジア出版人会議編　**二五二〇円**

20世紀ユダヤ思想家　1
来るべきものの証人たち
ブーレッツ　哲学と宗教の間の知的格闘を3巻に再構成。1はコーエン、ローゼンツヴァイク、ベンヤミン。**合田正人他訳　七一四〇円**

[二月]

失敗の効用
外山滋比古　人間、失敗してはじめてわかることがいくらでもある。『忘却の力』に続く生きるヒントに満ちたエッセイ。**二四一五円**

大隈重信関係文書　7　せい―とく
田中正造が大隈に宛てた29通をはじめ、高田早苗、副島種臣など、175名・725通収録。**早稲田大学大学史資料センター編　一〇五〇〇円**

解離の病歴
ジャネ　19世紀、最も卓越した臨床家による解離5症例。ヒステリーの核心に鮮やかに迫る精神医学の源流。**松本雅彦訳　三九九〇円**

われら新鮮な旅人
長田弘　60年代の青春を代表するデビュー詩集に伝説の二篇を加えた決定版。福島出身の詩人の言葉は今日に生き続ける。**一八九〇円**

パゾリーニ詩集
異端と醜聞、歴史と性愛の交錯点で、二〇世紀イタリアを駆け抜けた不世出の詩人。その精髄を一巻本で。**四方田犬彦訳　四七二五円**

天職の運命　スターリンの夜を生きた芸術家たち
武藤洋二　史上最大の国家権力下ショスタコーヴィチ、トロツキイらの生と創作。壮烈なスターリン期文化論。好評重版。**六〇九〇円**

〈大人の本棚〉
富岡日記
和田英　十六歳で富岡製糸場の伝習工女となった著者の回想。近代の礎の時代を懸命に生きた女性の物語。**森まゆみ解説　二六二五円**

ドイツを焼いた戦略爆撃　1940–1945
フリードリヒ　容認される大量殺人とは。戦争犯罪とは。英米軍による爆撃下ドイツの苦しみを初めて描く。**香月恵里訳　六九三〇円**

スペイン内戦　上
ビーヴァー　軍部反乱から代理世界戦争に拡大した内戦像を一新。欧米でベスト&ロングセラー。好評重版。**根岸隆夫訳　三九九〇円**

スペイン内戦　下
ビーヴァー　ソ連崩壊で利用可能になった厖大な史料を渉猟。20世紀を象徴する戦争を初めて公平に描く通史。**根岸隆夫訳　三七八〇円**

[三月]

モデルニスモ建築
ブイガス　ガウディほか二十世紀初頭のカタルーニャ建築運動の全容を近代建築史に組み入れた画期的名著。**稲川直樹訳　五八八〇円**

メアリー・シドニー・ロウス
シェイクスピアに挑んだ女性
楠明子　ルネサンスの家父長制イデオロギーに反旗を翻し、女性の優れた特性を謳った英国初の女性作家のドラマの全貌。**三三六〇円**

現象としての人間　[新版]
テイヤール・ド・シャルダン　科学とキリスト教の総合を目指して、深遠な思想を展開。「生涯と仕事」を付す。**美田稔訳　四四一〇円**

利他行動をめぐる凄絶な進化学史

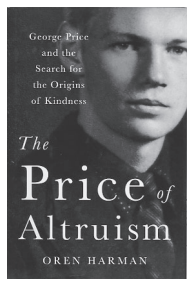
オレン・ハーマン
≪親切な進化生物学者　ジョージ・プライスと利他行動の対価≫
垂水雄二訳

生存競争と淘汰のもとで、なぜ自己犠牲性や利他行動が生じたのか？　本書は哲学的問いをはらむ科学ノンフィクションであり、ホームレスとして死んだ異端の科学者プライスの驚愕の伝記でもある。

第Ⅰ部では、メイナード・スミス、ロナルド・フィッシャーら巨星たちが織りなす興奮の学問史をたどる。利他行動は結局のところ自己の利益、あるいは自己を含む群（グループ）の利益を目的としているのか？　科学者たちは利他行動の新たな理解に到達するたびに、その殺伐たる含意に直面し、この問いを繰り返してきたのだ。一方、マンハッタン計画の脇役だったプライスは、冷戦時代のヒステリーに衝き動かされ、ゲーム理論や最適化アルゴリズムなど、いみじくも利他行動の新理論に必要な概念のすべてを、人知れず咀嚼していた。

第Ⅱ部は、学問史とプライスの伝記が合流するところから始まる。プライスが導きだした方程式は利他行動の理論についに普遍的定式を与え、「多層レベル陶太」という大きなダイナミクスを見渡すものだった。それは科学者の人生における、鳥肌の立つような収斂の瞬間。そのときすでに彼は、純粋な「無私」の存在証明という究極の命題に向かって走り出していた。

最期は極端な宗教的献身、過激な利他主義にとりつかれ、すべてを失って自殺したプライス。彼の人生は、生身の人間としての科学者自身と、科学が提起する命題の〈相克〉を凄絶にものがたり、読む者を圧倒する。進化学の哲人ビル・ハミルトンとプライスの真率な対話にも胸を打たれる秀作。【十二月中旬刊】



（四六判・608頁・四四一〇円）［生物学・進化］

もの言う芸術家

ハンス・ウルリッヒ・オブリスト
坪内祐三・文　尾方邦雄・訳
≪アイ・ウェイウェイは語る≫

発売直後に、中森明夫がツイッターでつぶやいた。「クリエイター志望の若者は『アート・スピリット』と『アイ・ウェイウェイは語る』とジョブズの伝記は必読ですね。」さすがの感度。そして「スティーブ・ジョブズ＝一九五五年生、アイ・ウェイウェイ＝一九五七年生か…考えさせられるなあ」……なるほど。

アイ・ウェイウェイ（艾未未）は、父親の艾青が反共のかどで追放された新疆ウイグル地方で育った。僻地である上に文化大革命の時期ゆえ毛沢東の言葉以外はほとんど教えられず、二〇世紀の芸術についても何も知らなかった。二十歳になる頃、北京電影学院に入る。同窓には映画監督になった陳凱歌など。八〇年代、ニューヨークに単身渡り「アーティスト」になった！

初めて体験するデュシャンやウォーホル。しかしウェイウェイは、中国系アメリカ人芸術家にならず、九三年北京に帰郷して現代美術のリーダーとなる。ウィトゲンシュタインにならい自宅兼スタジオを設計建設。その評判がやがて北京五輪の「鳥の巣」スタジアムや、アーバニストとしての仕事に。同時に政府批判を堂々とするブログ（三年で閉鎖）などなど。欧米からルネサンスマンとも呼ばれる彼は、いったい何者なのか？

今年の四月に身柄を拘束され、保釈後の現在も当局の監視下にあるアイ・ウェイウェイ。その人生と思想を注目のキュレーター、オブリストが聞き出したこの発言集は、ペンギンブックスから支援のため緊急出版された。芸術家として、活動家として、何よりも人間として、胸襟をひらいて語る姿が清々しい。

同世代人の坪内祐三がこの「凄い人」「枠外の人」たるセルフメイドの人物に感動、熱を込めた文章を本書に寄せている。

［現代美術・現代中国・思想］（四六判・200頁・二六二五円）

日本オリジナル編集の全3巻

冨原眞弓訳《シモーヌ・ヴェイユ選集 1 初期論集――哲学修業》

三十四年の生涯をかけて、ヴェイユは「地表に蔓延する不幸」を考え抜いた。リセの哲学教師から、工場で旋盤を廻す生活に飛び込み、精神を浸食する労働の過酷さを知る。内戦下のスペインへ赴き、義勇軍として前線へ――力と社会、悪、正義、労働の霊性……理屈でなく身をもって築かれた思想の全体像をみわたす、全三巻の日本オリジナル選集が刊行開始。

ヴェイユ

第Ⅰ巻『初期論集――哲学修業』は、初邦訳の全24篇。16歳でアンリ四世校のアラン（注）の哲学クラスに提出した自由作文に始まり、「美と善」「知覚について、あるいはプロテウスの冒険」「時間について」「職業の道徳的機能」ほか、文学論、断章を編んだ若き日の論文集。【一月十日刊】［哲学・思想］

（A5300頁・予価五〇四〇円）

▼続刊　Ⅱ『中期論集――労働・革命』Ⅲ『後期論集――霊性・文明論』（半年ごと刊行予定。リーフレット呈。本紙五面もご参照ください）

バレエ芸術の天才伝・決定版

シェング・スヘイエン
鈴木晶訳
《ディアギレフ伝　芸術に捧げた生涯》

セルゲイ・ディアギレフは神話的スケールの人物といえる。ロシアでの雑誌『芸術世界』刊行やキュレーターとしての活躍に飽き足らず、独立バレエ団を結成、「バレエ・リュス」はパリ、ロンドン、ローマ、ベルリン、マドリードなどの都市を舞台にバレエ界を席巻し、彼は大戦間期のアートシーンに君臨する。

舞踊・演劇・音楽・視覚芸術を一変させたこの天才はいっぽうで家も財産も持たず、一九二九年夏にヴェネチアに没するまで彗星の如き生涯を送った。ドビュッシーは「石をも踊らせる、あの恐ろしい、だが魅力的な男」といいコクトー、マティス、ピカソ、サティらも、この魔術師にして聖なる野獣に驚かされた。ゲイであることを隠さず常人を越えたエネルギーでベルエポックを駆け抜けた。

とりわけロシアに残された一次資料の徹底的な研究にもとづき、従来の伝記を一新するとともに、第一級の読み物である本書は、かつてバックル『ディアギレフ』を翻訳しただけでなく、ニジンスキーやバレエについての著書も多い第一人者を訳者に得て、まさにディアギレフ伝および当時のバレエ史、芸術文化史の決定版となった。写真多数。【二月中旬刊】［芸術・伝記］

（A5560頁・予価七九八〇円）

FUKUSHIMA REQUIEM

長田弘
≪詩の樹の下で≫

詩人長田弘は一九三九年、福島に生まれた。

「この小さな本のモチーフとなったのは、樹や林、森や山のかさなる風景に囲まれて育った幼少期の記憶だ。わたしの幼少期は、そのままこの国の昭和の戦争と戦後の季節にかさなる。」

「心影としてのこる一本一本の樹影の記憶をたぐりよせて、書く。『詩の樹の下で』は、そうした幸福の再確認の書となるべきものだったが、そうはならなかった。」

早春の大地震、大津波、原発の大事故。その惨状が伝えられるなか、著者は病院で大きな手術を受けていた。そして、予後の日々に思い知ったのは「あたかも個人の死命さえ悲しむことがかなわないほどの、茫漠とした寂寞。」

本書は、五月にNHKテレビで朗読された「人はじぶんの名を」他、あのことの前後に書きとめられた詩文三九篇から成っている。どのことばも樹木、そして故郷の記憶。

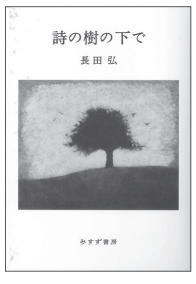
特別な年の暮れ、詩人がねがうのは、死者の霊をよびかえす、地霊を興す、という意味での「復興」への祈りにくわわることである。

「もっとも遠いはずの記憶が、年齢を積むうちに、むしろもっとも近い風景として、いつかじぶんのすぐそばに立ちあらわれてくるということに、気づく。」

鎮魂歌でありながら、深い慰めを与えてくれる『詩の樹の下で』は、この詩人のたどりついた場所でもあるのだ。

［詩集・エッセイ］

（A5判・120頁・一八九〇円）



みすず書房新刊

（2011・1～12）2
東京・文京・本郷5
TEL〇三三八一四〇三一
（価格は税込です）

他者の苦しみへの責任
ソーシャル・サファリングを知る
クラインマン他　貧困・圧政など、社会に組みこまれた苦しみや人権への暴力を可視化する。**坂川雅子訳・池澤夏樹解説　三五七〇円**

愛、ファンタジア
ジェバール　独立戦争下のアルジェリアを舞台に、文化の衝突と少女の運命を圧倒的に描き出した傑作長篇。**石川清子訳　四二〇〇円**

ゲーデルの定理
利用と誤用の不完全ガイド
フランセーン　誤用例を素材に、定理の正しい意義を解説。定理が拓いた哲学と数学のパノラマ。好評重版。**田中一之訳　三六七五円**

［四月］
ジョルジョ・モランディの手紙
岡田温司編　書簡、インタヴュー、批評等貴重な第一次資料を集成。第一線の研究者による解説と併せ画家の真実を探る。**四二〇〇円**

〈大人の本棚〉
獄中からの手紙　ゾフィー・リープクネヒトへ
ローザ・ルクセンブルク　自然、芸術、人間と世界への愛。革命家が宛てた不朽の書簡の瑞々しい新訳。**大島かおり編訳　二七三〇円**

〈大人の本棚〉
白桃　野呂邦暢短篇選
代表作にくわえ、故郷長崎に原爆が落ちた当日を描いた渾身の作「蘭と火」（単行本未収録）など厳選の全七篇。**豊田健次編　二九四〇円**

神話論理の思想
レヴィ＝ストロースとその双子たち
出口顯　主著『神話論理』全巻を精細に読みキーワード相互のパラ密的展開を照らす。歴史とは、他者の到来を俟つとは。**三六七五円**

災害がほんとうに襲った時
阪神淡路大震災50日間の記録
中井久夫　東日本大震災の後、何が問題となるか。歴史から学ぶ・「神戸」から考える。精神科医が関与観察した経験録。**一二六〇円**

客観性の刃　科学思想の歴史［新版］
ギリスピー　近代科学の歩みを、ガリレオからアインシュタインまで、科学者の創造に焦点をあててたどる。**島尾永康訳　六九三〇円**

記憶の山荘■私の戦後史
ジャット　『ヨーロッパ戦後史』『荒廃する世界のなかで』を遺して逝った歴史家の、強靭な自伝エッセイ集。**森夏樹訳　三一五〇円**

［五月］
知の広場　図書館と自由
アンニョリ　ネット時代を迎え、高齢化が進む社会の新しい図書館像を提言。海外の事例改革案を紹介する。**萱野有美訳　二九四〇円**

復興の道なかばで
阪神淡路大震災一年の記録
中井久夫　長びく避難所生活、仮設住宅やボランティアのあり方、周辺地域問題。こころのケアの今後は？　一年を追う。**一六八〇円**

〈大人の本棚〉
別れの手続き　山田稔散文選
人は思い出されているかぎり死なない。親しい人を呼びもどし、甦らせる、独特な作家のベスト十三篇。**堀江敏幸解説　二七三〇円**

〈恥ずかしさ〉のゆくえ
菊池久一　思いやりと慎み深さを内包する倫理を考究する。哲学、言語政治学、言語社会学の新知見から恥の文化を再考。**三三六〇円**

人の子イエス
ジブラーン　米国で一番著名なアラブ系詩人が、同時代を生きた七十数名の証言のかたちでえがくイエス。**小森健太朗訳　二九四〇円**

〈エコロジーの思想〉
自然倫理学　ひとつの見取図
クレプス　自然と人間の幸福との関係は。自然の内在的価値から、道徳的拡張理論へ。原理倫理学の試み。**加藤・高畑訳　三五七〇円**

あたらしい美学をつくる
秋庭史典　世界を情報の流れとしてとらえるとき、美はどこにあるのか。感性から計算へ、自然科学との対話に始まる美学。**二九四〇円**

生きるために登ってきた
山と写真の半生記
志水哲也　たった一人で岩と雪の山へのめりこんだ日々。北から南へ日本中の山を撮る日日。山に賭けた45年間の自叙伝。**二六二五円**

［六月］
住まいの手帖
植田実　戸建て、集合住宅の今昔。建築設計の最前線を半世紀見続けてきた編集者が味わい豊かに綴る「住まいのABC」。**二七三〇円**

真夜中の庭　物語にひそむ建築
植田実　「ムーミン」他ロングセラーの建築的フレームと細部を浮き彫りに。大人のためのファンタジー・児童文学案内。**二七三〇円**

映画もまた編集である
ウォルター・マーチとの対話
オンダーチェ　稀代の映画編集者マーチとブッカー賞作家が編集の意匠を語り尽す。映画観を変える対話。**吉田俊太郎訳　四八三〇円**

メカスの難民日記
メカス　反ナチ活動が発覚してリトアニアを出国し、ドイツの難民収容所から米国へ。詩人・映画作家の原点。**飯村昭子訳　五〇四〇円**

大人の本棚

シリーズ10周年

二〇〇一年の暮れに『素白先生の散歩』と『小津安二郎「東京物語」ほか』の二冊でスタートした本シリーズ。数々の書評による評価、「行き届いた編集、瀟洒な造本」という皆様の御好評に支えられて十歳を迎えることができました。その記念に左記の新刊五点を刊行、これからも魅力ある書目をお届けいたします。

岩田 宏

《アネネクイルコ村へ　紀行文選集》

岩田宏とは、翻訳家・小笠原豊樹の詩人としての名。マヤコフスキーを日本語にした詩人は一九六四年の歳末に横浜から船に乗って四日後、ナホトカ港に上陸。冷戦下のソ連による招待。しかし、関心は寒さと帽子なのだ。「どこへ行こうと人間は人間であって、それ以上でもそれ以下でもない。」（「冬の旅」）

七〇年代、メキシコに革命家サパタの跡をたずねる旅にもまた、同じ精神が息づいている。「その曰く言いがたい何ものかのためにこそ、私は旅をするのである。それは風景であって風景ではない。それは人物であり、事件であり、言葉であり、食物であり、音楽であって、そのいずれでもない。（…）私の旅から、今述べたもののすべてを引いたら何が残るか、答は私以外の何ものでもない。私だけだ。」（「十一月十二日」）

自由な旅とは何か？　それを堪能できる十六篇を、長年にわたるエッセイから精選。大人のための旅行術ともなる旅行文学の傑作である。

（四六判・248頁・二九四〇円）

野尻抱影　池内紀解説

《ろんどん怪盗伝》

「貴族富豪は上にのさばり、官吏は腐敗し、下民は貧苦にあえいでいた。この社会相への抵抗として現われたのが〈街道の騎士〉とよばれた追剥や大賊、義賊の群れで……民衆はひそかに痛快を叫ぶ者が少なくなかった……花をくわえて処刑される盗賊に喝采を送ったり、涙を流したりしたものである」（まえがき）

これは〈大盗や怪盗華やかなりし〉時代、イギリスは一七・一八世紀のほぼ実話である。この痛快なる歴史活劇の主役は二人。まずは、岡っ引きと大がかりな故買の両方を巧妙に仕切る悪のナポレオンたるジョナサン・ワイルド。これに戦いを挑むは若き牢破りの名人のジャック・シェパード。この若者はジョン・ゲイの傑作『三文オペラ』の主人公となった人気者である。この悪人二人の丁々発止の駆け引きをはじめ、当時の世相描写や牢獄の実態など、遠い巷のざわめきが聞こえてくるような時代物の秀作である。

（四六判・256頁・二九四〇円）

北條文緒

《猫の王国》

「留学体験にくらべれば猫の話はまったく些細な、せいぜい日常生活に気晴らしがひとつ加わるような次元のものだと思われるかもしれない。私自身そう思っていた。偶然の成り行きで野良猫を飼い始めたとき、人生の大きな扉が開いたのだとは思いもしなかった……」

アメリカ体験が社会的体験だったとすれば、猫体験は内面にかかわる体験だったといえよう。前者では私の視線は水平に、横へ横へと伸び、後者は垂直に内面に下りていく契機となった」（まえがき）

猫たちとの共生から生まれる新しい日常生活。その生き生きとした、思いもかけないドラマを愛猫家ならではの視線で描く三篇。さらに、四〇年前の留学の地ボストンを再訪して往時の出来事や人びととの交友を追想する貴重な自分史。最後の、ドイツ人女性シーギーの辿った悲劇は一篇の優れた短篇のようである。

（四六判・216頁・二七三〇円）

服部文祥編

《狩猟文学マスターピース》

「獲物を狩る、もしくは獲物として狩られる、という行為は人類史を通してずっと行われてきた。だが、それを言語表現にうまく置き換えている作品はそれほど多くない。……本書と並ぶような狩猟文学の作品群を集めるのは、現時と近未来では不可能だと思う」（服部文祥「解説」より）

サバイバル登山家、そして大の読書家。最近では「狩猟サバイバル」を実践する服部文祥がこよなく愛し、自らの血と骨としてきた国内外の狩猟文学から「マスターピース」の名にふさわしい十一作品を厳選。分野は小説、エッセイ、ノンフィクションなど多岐にわたる。人とケモノ、人と狩猟をめぐるみずみずしい思想の発露がここにある。

［収録作家］稲見一良、坂本直行、辻まこと、津本陽、星野道夫、宮沢賢治、アルセーニエフ、ナンセン、R・ネルソン、S・ハンチントン、リゴーニ・ステルン

（四六判・288頁・二七三〇円）

栃折久美子

《美しい書物》

「金魚の魚拓を一枚作ってくれませんか。形は、天から火のように墜ちてくる恰好、つまり頭が地上に向き、尾が天に向く恰好、にして」

ある日、若き編集者であった著者のもとに届いた室生犀星からの一枚の葉書。やがて魚拓が完成し、その手を離れるまでのなやましい日々を描いた「炎の金魚」ほか、名ブック・デザイナーにして名文章家による四十篇のエッセイ。「室生犀星と私」「作家たちとの出会い」「本のいのち」「ルリユール工房から」「記憶の風景」の五章からなる。

装幀やルリユール（製本工芸）、作家や仕事仲間など、さまざまな出会いについてひとつひとつの出来事を、丁寧に、丹念に、たしかめるように書かれた文章は、職人の手仕事そのものの味わいがある。「美しい書物」を作りだすことをめざして独自の道を拓いてきたひと。その仕事と人生を静かに伝える一冊。

（四六判・216頁・二七三〇円）

大人の本棚　既刊のご紹介

十年にわたって刊行してきた《大人の本棚》シリーズ。残念ながら品切れになっているものもあるが、いまでも入手可能なものを全点紹介しよう。

＊

まずは作家の精髄を一巻に編んだベスト版選集から。ただ単に有名作家を並べるのではなく、知られざる名文家や名高い作家の一側面に注目した編者の撰文が光っている。

池内紀編のベストセラー随筆選『**素白先生の散歩**』。監督シナリオを収録する、田中眞澄編『**小津安二郎「東京物語」ほか**』／岩淵達治編訳『**ブレヒトの写針詩**』／小野寺健編訳『**フォースター　老年について**』／外山滋比古編『**佐々木邦　心の歴史**』／中野好之編訳『**ジョンソン博士の言葉**』／吉川豊子編『**吉屋信子　父の果／未知の月日**』／木田元編『**太宰治　滑稽小説集**』／出口裕弘編『**谷譲次　テキサス無宿／キキ**』／飯吉光夫編訳『**ヴァルザーの詩と小品**』／胸を打つ冨原眞弓編訳『**ヴェイユの言葉**』／松浦寿輝解説『**立原道造　鮎の歌**』／坪内祐三編『**戸川秋骨　人物肖像集**』／孫娘が祖父の随筆を選んだ青柳いづみこ編『**青柳瑞穂　骨董のある風景**』／小沢信男編『**長谷川四郎　鶴／シベリヤ物語**』／千葉俊二編『**谷崎潤一郎　上海交遊記**』／いま巷で『幸福論』が再人気のアラン、山崎庸一郎編訳『**芸術について**』／池内了編の寺田寅彦『**懐手して宇宙見物**』／建畠晢編『**宮川淳　絵画とその影**』／岡崎武志編の野呂邦暢随筆選『**夕暮の緑の光**』と豊田健次編の野呂短篇選『**白桃**』／森於菟『**耄碌寸前**』／ツヴァイク短篇集『**チェスの話**』／堀江敏幸の解説がう

シリーズ〈大人の本棚〉10周年　記念フェア開催書店一覧

札幌市	紀伊國屋書店札幌本店	011-231-2131	静岡市	谷島屋呉服町本店	054-254-1301
つくば市	ACADEMIA イーアスつくば店	029-868-7407	名古屋市	丸善名古屋栄店	052-261-2251
さいたま市	ジュンク堂書店大宮ロフト店	048-640-3111	京都市	ジュンク堂書店京都 BAL 店	075-253-6460
千代田区	岩波ブックセンター信山社	03-3263-6601	大阪市	ジュンク堂書店大阪本店	06-4799-1090
中央区	八重洲ブックセンター本店	03-3281-1811		ジュンク堂書店難波店	06-4396-4771
新宿区	紀伊國屋書店新宿本店	03-3354-0131	神戸市	ジュンク堂書店三宮店	078-392-1001
渋谷区	MARUZEN ＆ジュンク堂書店渋谷店	03-5456-2111	姫路市	ジュンク堂書店姫路店	0792-21-8280
	紀伊國屋書店渋谷店	03-3463-3241	西宮市	ジュンク堂書店西宮店	0798-68-6300
豊島区	リブロ池袋本店	03-5949-2925	岡山市	丸善岡山シンフォニービル店	086-233-4640
立川市	オリオン書房ノルテ店	042-522-1231	福岡市	ジュンク堂書店福岡店	092-738-3322
武蔵野市	ジュンク堂書店吉祥寺店	0422-28-5333	熊本市	蔦谷書店熊本三年坂店	096-212-9111
藤沢市	有隣堂藤沢店	046-626-1411	大分市	ジュンク堂書店大分店	097-536-8181
新潟市	ジュンク堂書店新潟店	025-374-4411	鹿児島市	ジュンク堂書店鹿児島店	099-239-1221

すでに開催中の書店も含め、順次開催してまいります。開催期間など異なりますので、詳細は各店舗へどうぞ直接お問い合わせください。

みすず書房新刊（2011・1〜12）3

東京・文京・本郷5
TEL〇三・三八一四・〇一三一
（価格は税込です）

外来精神医学という方法
笠原嘉臨床論集　大病院ではできない治療とは？　街角のクリニックからみた患者の姿と医学のあり方。最新論考他10篇。三七八〇円

ジェイン・オースティンの思い出
オースティン＝リー　想像力と人気においてシェイクスピアに匹敵する天才を、生き証人の甥が語る回想記。**中野康司訳**　三七八〇円

［七月］

レヴィ＝ストロース　夜と音楽
今福龍太　『悲しき熱帯』『神話論理』を導きの糸にレヴィ＝ストロースの思考の核心を鮮やかに響かせる、創造的入門書。二九四〇円

20世紀ユダヤ思想家　2　来るべきものの証人たち
ブーレッツ　近代的理性とメシアニズムとの融和と対立。2はショーレム、ブーバー、ブロッホ。［全3巻］**合田正人他訳**　七一四〇円

文字の導火線
小池昌代　深い読書から生み出された言葉が何かを求めて本を読む人と人を結びつける。百冊余を紹介する充実の書評集。二三一〇円

ルチア・ジョイスを求めて
宮田恭子　装飾文字と『ケルズの書』を核に、ジョイス父娘が生きた狂気と天才、愛と相克の深層に迫るオリジナルな論考。三九九〇円

現代日本の気分
野田正彰　精神医学者が日本再生の今後を問う。「被災者理解へ問われる人間観」などを所収、ラディカルな思考を提示。二九四〇円

これが見納め　絶滅危惧の生きものたち、最後の光景
ダグラス・アダムス　諧謔味満載で綴る不朽のネイチャー・ルポ。リチャード・ドーキンス序文。好評2刷。**安原和見訳**　三一五〇円

敗戦三十三回忌　予科練の過去を歩く
宮田　昇　15歳の少年を徴集した海軍。「消耗要員」の日々の足跡を琵琶湖周辺に辿り、同輩の戦後を追う重層的エッセイ。二四一五円

［八月］

ヒトの言語の特性と科学の限界
鎮目恭夫　ウィーナー、シュレーディンガー等の翻訳とともに「歴史の中の科学者とは何か」を考えてきた著者の到達点。二六二五円

記憶を和解のために　第二世代に託されたホロコーストの遺産
ホフマン　ホロコーストの意味をどう伝えればよいか。繋ぐ存在としての第二世代の著者が描く思索と展望。**早川敦子訳**　四七二五円

メタフィジカル・クラブ
メナンド　米国社会の根幹プラグマティズム哲学の成立を鮮やかに描きピューリッツァー賞受賞の大作。**野口・那須・石井訳**　六三〇〇円

荘子に学ぶ　コレージュ・ド・フランス講義
ビルテール　中国古典を道教でなく哲学として読み換える西欧の新たな眼差し。養老孟司氏の書評で話題の本。**亀節子訳**　三一五〇円

〈大人の本棚〉チェスの話　ツヴァイク短篇選
小説は面白くなければ意味がない。版画コレクターや書痴、不倫やチェスをめぐる短篇の醍醐味。**池内紀解説　辻・関他訳**　二九四〇円

福島の原発事故をめぐって　いくつか学び考えたこと
山本義隆　一刻もはやく原発依存社会から脱却すべきである。原発ファシズムの全貌を説得的に描いた最も信頼に足る書。一〇五〇円

戦後日本デザイン史
内田　繁　インテリアデザインの第一人者が綴る建築・製品・ポスター・衣服などジャンルを超えたデザインの戦後と未来。三五七〇円

［九月］

ランボー全集　個人新訳
永遠に来たるべき詩人ランボー、初めての個人訳全集。凄絶な詩篇と書簡によって天才詩人の全貌に触れる。**鈴村和成訳**　六三〇〇円

乳幼児精神医学入門
本城秀次　乳幼児のこころはどのような体験をし、母親や周囲の人々と関係を築くのか。第一人者による最良の見取り図。三三六〇円

古代ローマ生活事典
ヴェーバー　衣食住から冠婚葬祭、医療、教育、エネルギー、レジャーまで。古代の日常を知る全213項目。**小竹澄栄訳**　一二〇〇〇円

ティエンイの物語
フランソワ・チェン　戦争と革命の中国を舞台に男女三人の運命を描く長編小説。歴史と芸術に満ちた感動作。**辻 由美訳**　三五七〇円

テクノロジーとイノベーション　進化／生成の理論
アーサー　新技術はどこから生れ、どこへ行くのか？　未来を見通すための枠組がここにある。**有賀裕二監修　日暮雅通訳**　三八八五円

オットー・クレンペラー　あるユダヤ系ドイツ人の音楽家人生
ヴァイスヴァイラー　新資料に基づく伝記。新たな解釈を生む詳細な記述が出色。鑑賞の手引としても最適。**明石政紀訳**　四八三〇円

みすず書房創立65周年企画

新シリーズ

《始まりの本》

始まりとは始原（＝オリジン）。
そこから生い育つさまざまな知識の原型が、
あらかじめ潜在しているひとつの種子である。
新たな問いを発見するために、
いったん始原へ立ち帰って、
これから何度でも読み直したい現代の古典。
未来への知的冒険は、
ふたたびここから始まる！

「始まりが存在せんがために人間は創られた」
（アウグスティヌス）
「人間はそれ自らが始まりである」（アーレント）
「始まりとは〈差異をつくる〉ものだ」（サイード）
人文諸科学はじめ、知が錯綜し、新たな展望を示せない不透明な今の時代に、だからこそ〈始まり〉に立ち帰って、未来への指針を与える本。
これだけは押さえておきたい現代の古典を、この《始まりの本》と名づけた新シリーズに編み、11月10日刊行開始いたしました。

■第一回配本6冊

『**臨床医学の誕生**』ミシェル・フーコー　神谷美恵子訳　斎藤環解説
「この本の内容は空間、ことば、死、まなざしに関するものである」――人間科学の医学的基盤とは何か。18―19世紀における認識論的切断を問う。（392頁・三九九〇円）

『**二つの文化と科学革命**』C・P・スノー　松井巻之助訳　S・コリーニ解説
「科学はわれわれの心が体験する総てのものと同化されなければならない」――科学と文化を語る必須文献。70頁余の新解説を加える。（208頁・二九四〇円）

『**天皇の逝く国で**』［増補版］ノーマ・フィールド　大島かおり訳
「この社会が差しだすご褒美に膝を屈するのを拒んでいる」――「自粛」「常識」という社会の抑圧に、抵抗できるか。全米図書賞受賞。（400頁・三七八〇円）

『**可視化された帝国――近代日本の行幸啓**』［増補版］原武史
「天皇の身体の交代は支配そのものの重大な転換を伴った」――全国をまわり生身の身体をさらした三代の天皇を追う。「国体」の視覚化」他1補論。（520頁・三七八〇円）

『**哲学のアクチュアリティ――初期論集**』テオドール・W・アドルノ　細見和之訳［初書籍化］
「だからこそ、哲学はたえず新たに始めなければなりません」――表題作を筆頭に初期の重要論考4編。はじめての公刊。（200頁・三一五〇円）

『**進歩の終焉――来るべき黄金時代**』G・S・ステント　渡辺・生松・柳澤訳　木田元解説
「この黄金時代の到来によって、芸術と科学は終着点に達するであろう」――人類の歴史観から導かれた予言の書。（226頁・二九四〇円）

戦後思想が生んだ金字塔

藤田省三《天皇制国家の支配原理》

戦後日本を代表する思想家が一九五六年に書きあげた表題論文を軸に一九六六年に刊行されたデビュー作『天皇制国家の支配原理』は、それまでのマルクス主義者を中心とする「社会的経済的基盤」や「政治的機構」から「天皇制」を分析するアプローチに代わり、明治という近代国家が出来上がってゆく経緯の中で、ムラ社会のあり方と国家をつなぐ装置としての「天皇制」を思惟内在的なアプローチで鮮やかに浮き彫りにした思想史の労作として、まさに画期的であった。『精神史的考察』『全体主義の時代経験』へと至るその後の著者の思想的歩みは、まさに本書の発展と変奏といってよい。この名著を、著作集版を底本に新たに刊行。巻末に「藤田省三著作目録」を付す。解説・宮村治雄【一月十日刊】［思想史］（四六310頁・予価三一五〇円）

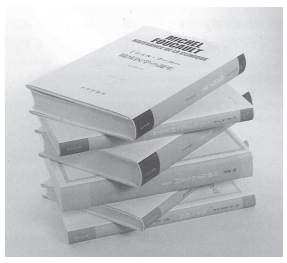
幻のデビュー作

ハンナ・アーレント《アウグスティヌスの愛の概念》　千葉眞訳

政治的・道義的に急速な転換をみた一九二〇年代のドイツ――ヤスパースの指導とハイデガーの影響のもとに書かれ、ドイツで刊行されたこの博士論文を、アーレントはナチスの政権掌握による米国亡命にも携え、長い年月をかけて手を加えつづけた。
ここでアーレントは、アウグスティヌスという哲学史上・神学史上の巨人と、愛について、また社会の絆の存在論的根拠について、さまざまな角度からの対話を試みている。共同性の存在論を問うことで、自己と隣人と世界に対するみずからの魂の位置づけを探ろうとするかのように。
後年、アーレント自身が加えた注釈・修正について詳細に言及した解説に、今回新たに、附録「アーレント政治哲学の展開と著作」を付す。
【一月十日刊】［哲学・思想］（四六296頁・予価三一五〇円）

シリーズ特色

■すでに定評があり、これからも読みつがれていく既刊書、および今後基本書となっていくであろう新刊書で構成
■ハンディな造本、読みやすい新組み、新編集



続刊予定

『**ノイズ――音楽／貨幣／雑音**』J・アタリ　金塚貞文訳
『**チーズとうじ虫**』C・ギンズブルグ　杉山光信訳
以上2冊は来年三月刊行予定、以降三カ月ごとに3、4冊ずつ配本予定です。新編集、新解説、増補、そしてアドルノ『哲学のアクチュアリティ』同様に、初刊行の書目にもご期待ください。四六判、ソフト上製、二〇〇―四〇〇頁、予価二六二五―三九九〇円。

リーフレットのご案内

以下のシリーズや全集・選集等には、内容紹介のリーフレットをご用意しています。

▼オンデマンド版

まず、ふだん書店の店頭などでなかなかお目にかけることのできないオンデマンド版の書籍をこの機会にご紹介いたします。オンデマンド版とは、読者からのご注文に応じて、そのつど一冊一冊を印刷・製本するものです。

『**現代史資料**』全45巻・別巻1（索引）
『**続・現代史資料**』全12巻
日本の現代における権力と自由の問題への再考をうながす、最上のドキュメント集成『現代史資料』は、「ゾルゲ事件」全3冊に始まり「関東大震災と朝鮮人」「満洲事変」「日中戦争」「社会主義運動」「満鉄」「思想統制」「国家総動員」「治安維持法」まで、刊行は一九六二―七三年にわたり、第一三回菊池寛賞、第三一回毎日出版文化賞受賞。その完結後八〇年代に「教育――御真影と教育勅語」全3冊ほか新集の未公開資料による『続・現代史資料』を編集刊行。

『**みすずリプリント**』全20巻
山路愛山『独立評論』全7冊をはじめ、吉野作造など近代日本思想を知る名著選。

『**陸羯南全集**』全10巻
新聞「日本」の主筆として日本の政治を深く鋭く論じ、世論に大きな影響を与えた陸羯南の社説を集成。

『**宇垣一成日記**』全3巻
満洲事変、盧溝橋事件の時期に朝鮮総督、外務大臣を務めた陸軍軍人・宇垣。日本現代史の重要人物の日記資料。

「**思想家研究セレクション**」全13冊
ミル、ヴェーバー、パレート、内村鑑三、新渡戸稲造ほか社会と経済の「正義」や「公正」を徹底して追究した思想家を考察する研究書精選。

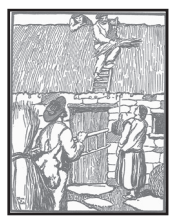
＊

オンデマンド版のほか次のリーフレットもございます。ぜひ併せてご請求ください。
■K－W・ヴェーバー『**古代ローマ生活事典**』小竹澄栄訳
■『**ランボー全集　個人新訳**』鈴村和成訳　全1冊
■ブーレッツ『**20世紀ユダヤ思想家**』全3巻
■『**シモーヌ・ヴェイユ選集**』全3巻（本紙三面にご紹介）

れしい、山田稔散文選『**別れの手続き**』。

＊

それから古典の新訳や初訳など、意欲的な翻訳書にも見るべきものがある。
中でも宮下志朗編訳『**モンテーニュ　エセー抄**』は白水社で全訳刊行中の今も便利な一巻として大好評。その他、シュペルヴィエル『**海の上の少女**』（綱島寿秀訳）／リゴーニ・ステルン『**雷鳥の森**』（志村啓子訳）


『アラン島』挿絵

はこのイタリアの地味な作家を一躍知らしめた。シング『**アラン島**』（栩木伸明訳）は半世紀ぶりの新鮮な日本語で感動。／ボードレール『**パリの憂鬱**』（渡辺邦彦訳）／『**スピノザ　エチカ抄**』（佐藤一郎編訳）／『**ミル自伝**』（村井章子訳）／武谷なおみ編訳『**短篇で読むシチリア**』は読者に待たれていたようだ。ローザ・ルクセンブルク『**獄中からの手紙**』（大島かおり編訳）も必読だろう。

＊

名著名訳の復刊に際しては定本をめざしている。なかには増補版もある。
『**小沼丹　小さな手袋／珈琲挽き**』／スティヴンスン『**旅は驢馬をつれて**』（小沼丹訳・残部僅少）アラン＝フルニエ『**グラン・モーヌ**』（長谷川四郎訳）／アレー『**悪戯の愉しみ**』（山田稔訳）／湯川秀樹『**本の中の世界**』／庄野潤三『**ガンビア滞在記**』／中高年のバイブルとなった早川良一郎『**さみしいネコ**』／恋愛から世界文学を語るエッセイ、田宮虎彦『**さまざまな愛のかたち**』／草光俊雄『**明け方のホルン**』／原田治『**ぼくの美術帖**』はしばらくぶりの新版。野呂邦暢『**愛についてのデッサン**』は古本探偵物の傑作。早川良一郎『**むだ話、薬にまさる**』／小山清『**小さな町**』／庄野潤三『**ザボンの花**』（残部僅少）／宮田昇『**新編　戦後翻訳風雲録**』／『**カフカ自撰小品集**』（吉田仙太郎訳）／吉屋信子『**私の見た人**』／石田五郎『**天文屋渡世**』／和田英『**富岡日記**』。

＊

シリーズ・オリジナルの随筆集にも文学の香り高い大人のテイストがある。
外山滋比古『**お山の大将**』富士川義之『**気まぐれな読書**』／新倉俊一『**詩人たちの世紀**』／坂本公延『**作家の本音を読む**』『**バラはバラの木に咲く**』／小堀杏奴『**のれんのぞき**』など、なにとぞお見逃しなく。

＊

最後にこのシリーズには名アンソロジーが二冊。
飯島耕一・加藤郁乎『**江戸俳諧にしひがし**』と長田弘選『**本についての詩集**』。各二五二〇―二九四〇円。

みすず書房新刊

（2011・1～12）4

東京・文京・本郷5
TEL〇三―三八一四―〇三一一
（価格は税込です）

■復刊

本年は、カール・グスタフ・ユング没後50年を記念して、六月に、次の二点を復刊いたしました。

タイプ論　ユング　フロイトとの訣別後八年の沈黙を経て発表した記念碑的大著。雄大な思想史的世界を展開する。［復刊］林道義訳　八八二〇円

転移の心理学　ユング　『哲学者の薔薇園』の挿絵を材料に転移現象を論ずる。錬金術過程＝二人の間の個性化過程。［復刊］林・磯上訳　二九四〇円

［十月］

ゴシックの本質　ラスキン　高貴なる荒々しさを称えよ。明晰にして流麗な新訳でおくるラスキン美学の精髄。W・モリス序。川端康雄訳　二九四〇円

トランスレーション・スタディーズ［論集］　他者をいかに理解するか。近世日本の異文化接触から世界文学、文化翻訳、コミュニティ通訳まで。佐藤＝ロスベアグ編　五〇四〇円

［十二月］

火の記憶　3　風の世紀　ガレアーノ　ラテンアメリカの苦悩の歴史を類のない技法で封じ込めた二〇世紀最大級の文学。全巻完結。飯島みどり訳　六三〇〇円

■書物復権　8社共同復刊［五月］

〈書物復権〉参加8社（岩波書店・紀伊國屋書店・勁草書房・東京大学出版会・白水社・法政大学出版局・未来社・みすず書房）では、毎年、読者のみなさまからのリクエスト投票により、共同復刊を実施しています。本年で第15回を迎えました。

歴史は科学か　改訂版　E・マイヤー／M・ウェーバー　歴史の概念的再構成をめぐり、歴史認識のあり方を考察した二論文。［復刊］森岡弘通訳　二九四〇円

地中海世界　合本　ブローデル編　三つの文明が交差し展開する数千年を、現在と過去の往還によって語るテーマ別論集。［復刊］神沢栄三訳　四四一〇円

過去と未来の間　政治思想への8試論　アーレント　いかに思考するか。20世紀の時代と哲学と政治を交差した、亡命ユダヤ人女性の思索。［復刊］引田・齋藤訳　五〇四〇円

知識人と権力　歴史的―地政学的考察　グラムシ　知識人とは、サバルタンとは、地政学的考察とは。「南部問題についての覚え書」他五章。［復刊］上村忠男訳　二九四〇円

歴史を逆なでに読む　ギンズブルグ　歴史とフィクション、証拠、他者認識をめぐり、新たな歴史研究の可能性を示す論集。［復刊］上村忠男訳　三七八〇円

近代文化史　1　フリーデル　中世の食卓から天国の有様まで逸話とスキャンダルで語る、文化史の傑作。［オンデマンド版］宮下啓三訳　八九二五円

近代文化史　2　フリーデル　かつらの分析から実践理性へ。文化のパラドックスを深刻かつ軽妙に描く。［オンデマンド版］宮下啓三訳　九四五〇円

近代文化史　3　フリーデル　ヘーゲル世界の解体から日露戦争まで。故郷を喪失した近代人の黄昏を展望。［オンデマンド版］宮下啓三訳　九九七五円

サミュエル・ジョンソン伝　1　ボズウェル　最初の英語辞典を編纂した18世紀英国文人の意見。鋭い人間観察と会話。［オンデマンド版］中野好之訳　一二六〇〇円

サミュエル・ジョンソン伝　2　ボズウェル　「私は聖書を読むと同じように、毎日ボズウェルを読む」（スティーヴンソン）。［オンデマンド版］中野好之訳　一〇五〇〇円

サミュエル・ジョンソン伝　3　ボズウェル　「ジョンソンは、ボズウェルの伝記において、いっそう偉大だ」（バーク）。［オンデマンド版］中野好之訳　一〇五〇〇円

昭和憲兵史　大谷敬二郎　軍や国民一般に対する警察権を持つ憲兵の歴史を、憲兵隊の中枢にいた著者が叙述する。［オンデマンド版］一三六五〇円

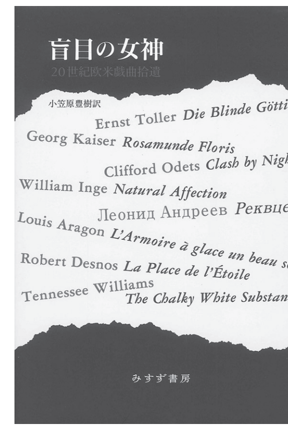
大戦間期の日本陸軍　黒沢文貴　大正デモクラシー高揚に、陸軍が示した意外に柔軟な姿勢を明らかにする政治外交史研究。［オンデマンド版］九九七五円

よく聞こえる演劇を！

E・トラー　G・カイザー　C・オデッツ
W・インジ　Л・アンドレーエフ　L・アラゴン
R・デスノス　T・ウィリアムズ

≪盲目の女神　20世紀欧米戯曲拾遺≫

小笠原豊樹訳



小笠原豊樹は名翻訳者として名高い。エレンブルグ、マヤコフスキー、プレヴェールらの詩作品、ソルジェニツィン、ジョン・ファウルズらの小説、ブラッドベリー、バローズらのSF、ロス・マクやスピレーンの探偵物、その他その他。その彼が、びっくりした。最晩年のテネシー・ウィリアムズが『かもめ』を英訳するにあたって「よく聞こえるチェーホフにしたい」と意気込みを語ったらしい。アメリカでもそうだったのか！

この一言が、この大冊にまとめられた欧米戯曲の隠れた名作の日本語訳に彼を向かわせた。イデオロギーに潰された作家たち、状況や世評に傷つけられた戯曲の名誉回復。選ばれた作品は、ドイツ語、英語、ロシア語、フランス語から「よく聞こえる」日本語になっている。

エルンスト・トラー『盲目の女神』とゲオルク・カイザー『ロザムンデ・フローリス』は、ともに表現主義の作家による殺人をめぐるサスペンス。左翼演劇人クリフォード・オデッツ『夜ごとの衝突』は、後にフリッツ・ラングが映画化する。映画『ピクニック』の脚本家ウィリアム・インジ『当然の気持』は作者自殺の四日後に再演されて評価された。アンドレーエフ『レクイエム』は最後の作品。アラゴン『ある晩、鏡付きの衣装箪笥が……』は珍品。デスノス『海星広場』は映画『ひとで』と一味違う「アンチ・ポエム」。そしてテネシー・ウィリアムズ『チョークの粉』は核戦争後の未来世界を描く晩年の傑作である。

本書に収める八篇、どれもまるで新作のように生き生きと、読者の頭のなかで台詞が響く。演劇ファンにはたまらない。のみならず日頃は演劇に無関心な本読みにとっても特別な贈り物である。各作品に当時の資料、巻末に訳者の解題を施した本巻は、古くて新しい世界への幕を開ける。

（A5判・496頁・八一九〇円）

もうひとつのライフワーク

高橋悠治《カフカノート》《カフカ／夜の時間　メモ・ランダム》

〈カフカの文章は、入眠幻覚のように、書こうとする意志を鎮めて、心身が脱力したときにあらわれるイメージやことばを捉えて、芭蕉がいうように「もののひかり消えぬうちに書き留める」作業が俳句に完結するのではなく、うごきだしたことばが停まるまでひきのばされ、停まりそうになる時には、うごきがそれ自体をコマの緒のように鞭打っても先へ先へと逃げていく。落ちかかってくるものに対しては、まず避ける、それからすこしずつ近づいていく、触れてたしかめる、最後に受け入れる、という複雑な経路、まがりくねった慎重な対応の軌跡が生まれるだろう。〉

カフカは、孤高のピアニスト・作曲家高橋悠治の活動を支える影の思索者。カフカの書きかた・表現する者の自意識の状態に啓発され、テキストの翻訳と舞台制作をもうひとつのライフワークにしてきた。今年、新たに翻訳・作曲・構成をおこなった舞台『カフカノート』のスコア、対訳台本、制作ノートを一冊に収録。すすみ、曲がり、停まり、途絶えてはまたすすむその書きかたをなぞるような訳文のカフカ。読む眼の前に、カフカの姿が現われてくる。

同時に、カフカとの出会いを記した一九八九年の著作『カフカ／夜の時間』(晶文社)を新たに刊行。始まりは病院のベッドの上で読んだカフカだった。読みなおされ、翻訳しなおされてゆくカフカとの濃密な対話が、まじりけのないことばで書き留められている。高橋悠治の音楽・創作のためのメモであり、制作にたずさわる人たちに多くの示唆をあたえてきた静かな名著。

［音楽・海外文学］

（A5判・各三三六〇円）

通訳・翻訳論から環境学まで

鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘編《異文化コミュニケーション学への招待》

「外国語教育から異文化市民の教育へ」「ネイチャーライティングからESD学まで」「地域言語は国際語になりえるか」「ユーモアを訳す」など。言語文化をめぐる普遍的な問いから人文社会科学としての方法論へと向かう、これら領域の最新成果を紹介する。

社会学、環境学、言語学、通訳翻訳学をふまえ、コミュニケーションの問題を考える人に送る新たな地平。

序章「異文化コミュニケーション学と環境学の現在」(小山亘)／第I部　異文化コミュニケーション「多文化共生とは」(宮島喬) 他／第II部　環境コミュニケーション「世界／自然とのコミュニケーションをめぐって」(野田研一) 他／第III部　言語コミュニケーション「異文化語用論の可能性」(平賀正子) 他／第IV部　通訳翻訳コミュニケーション「持続可能な未来と通訳翻訳学」(鳥飼玖美子) 他。瞠目すべき論稿を集成。

［社会学・通訳翻訳学］

（A5判・496頁・六三〇〇円）

R・Rとは、誰であったか

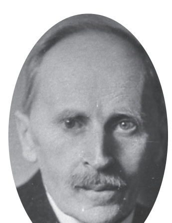
ベルナール・デュシャトレ《ロマン・ロラン伝　一八六六―一九四四》

村上光彦訳

みすず書房では一九四五年の創立時から『ロマン・ロラン全集』を刊行、その事業は八五年に完結した全四三巻の第三次『全集』におよんだ。この現象は日本に限ったことではなく、『ジャン・クリストフ』を筆頭にロランの作品は、二十世紀前半から後半にかけて、フランス本国はもとより、欧米諸国、中国でも多くの読者を獲得していた。しかし、七〇年代半ばあたりから、ロランは突然読まれなくなる。二十世紀前半の芸術・思想・政治に多大な影響をあたえたロマン・ロランとは誰だったのか。それに応えようとするのが、本書である。ソヴィエトとの関係など生涯を詳細に追い、ロランの歴史的制約と現代的意味を問う、最も信頼に足る伝記。二〇〇二年、フランスで文学賞を受けた。

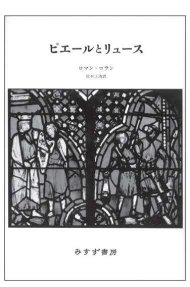
［フランス文学・伝記］

（A5判・504頁・九九七五円）



R・ロラン

▼ロラン『ピエールとリュース』宮本正清訳（一六八〇円）



翻訳学・翻訳研究
既刊書のご案内

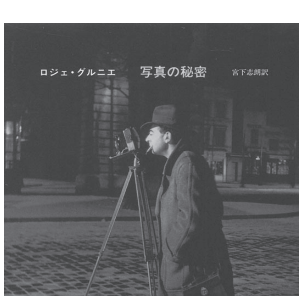
J・マンデイ『**翻訳学入門**』(四五一五円)、F・ポェヒハッカー『**通訳学入門**』(四二〇〇円) は、ともに鳥飼玖美子監訳。A・ピム『**翻訳理論の探求**』(武田珂代子訳、五二五〇円) ともども翻訳学・通訳学の基本図書です。鳥飼玖美子『**通訳者と戦後日米外交**』、武田珂代子『**東京裁判における通訳**』(各三九九〇円) は、通訳論また現代史の重要研究。A・ベルマン『**他者という試練**』(藤田省一訳、七一四〇円) はロマン主義ドイツの文化における翻訳の創造性を探究。翻訳通訳を含んでトランスレーションという行為をキーに、領域横断的で実世界へ貢献する研究の可能性をひらく佐藤＝ロスベアグ・ナナ編『**トランスレーション・スタディーズ**』(五面下に広告) はつい先々月刊。

カメラと人生

ロジェ・グルニエ

≪写真の秘密≫

宮下志朗訳



デジカメ全盛の今も写真アルバムが大切なものであると、東日本大震災で改めて知らされた。『ユリシーズの涙』のロジェ・グルニエは九〇歳を越えてなお書き続けるフランスの長老作家。彼は古いアルバムを見ながらこう思う。

「ほとんどが死んでしまった昔の仲間たちが、わたしを見つめている。悲しい喜び。(…)若くて、魅力的で、本当に美しかった男や女たち、彼らは絶対に老いたりすることなどありそうもなかった。だが、その一瞬ののちに、彼らは墓のなかにいるんだ、遺灰になってしまったのだと思わせられるのは、まったく耐えがたいことだ。わたしはアルバムを閉じるしかない。」

子供時代、最初に手にしたツァイス「ベビー・ボックス」、ホテルで孤独に死んだ父の遺品「フォクトレンダー」(貧乏人の「ローライフレックス」！) など歴代の愛機や戦時下での体験と戦後カミュの下で『コンバ』紙にいたときの思い出、ライカを持った二人の女性友達のたどった数奇な運命、写真家ブラッサイとの交友、その他……。

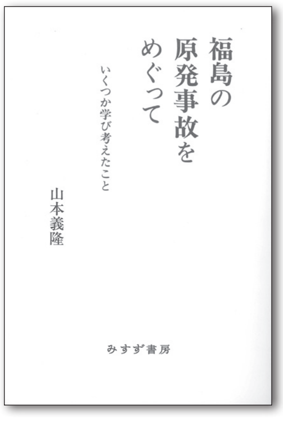
本書はカメラと人生を愛するすべての人々のための、言葉によるアルバムである。

（四六判・160頁・二七三〇円）

福島の原発事故をめぐって
いくつか学び考えたこと

山本義隆

2011年8月25日刊［8刷］
四六判　114頁　1050円



『一六世紀文化革命』（全2巻，2007年）の最終章で，自然を支配しようとした近代科学およびその科学技術への批判を著者は展開した．同書「あとがき」では，その極北にある核エネルギー問題にも紙面が割かれている．このたびの福島原発事故，およびその後の政府・東京電力・マスメディアはじめ日本社会の反応を目の当たりにした著者は，長年考えてきた核問題・原発依存社会について，はじめて自身の考えを一冊の本に書き下ろした．

「福島原子力発電所の大事故をめぐっては数多くの本が出ている．そのなかでこれは最も小さな，つましい一冊である．本文は註を含めてちょうど100ページ．……いかなる留保も置かず，どのような斟酌も必要とせず，述べるべきことをはっきり述べる」（池内紀評，毎日新聞）

山本義隆の本

磁力と重力の発見　全3巻

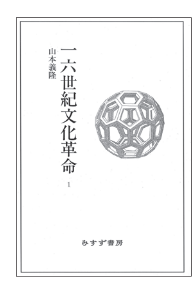
1　古代・中世　二九四〇円
2　ルネサンス　二九四〇円
3　近代の始まり　三一五〇円

「遠隔力」が近代物理学の扉を開いた。ニュートン、クーロンまで科学史空白の千年に、力概念の形成を追う。パピルス賞、毎日出版文化賞、大佛次郎賞受賞。

一六世紀文化革命　全2巻　各三三六〇円

『磁力と重力の発見』(二〇〇三年) あとがきには、こう書かれていた。「一五〇〇年代ルネサンスと言われている時期の西洋に〈一六世紀文化革命〉とも言うべき知の世界の地殻変動があったのではないかということに思い当たった。この点をさらに明確にする課題については、今後の宿題にしておきたい」。すぐ引き続いて本書が書き下ろされた。従来のルネサンス像に抗し、一七世紀科学革命を準備した技術者・商人・芸術家たちの実践を追う。

その『一六世紀文化革命』あとがきには、さらにこう書かれた。「一七世紀科学革命は、大学で高等教育を受け、中世スコラ学によって培われてきた厳密な論証の技術を身につけた知識人が、この職人・技術者の提起を受け止め、新科学形成のヘゲモニーを自分たちの手に取り戻すことによって達成された。……ところで、大規模化された科学技術がそのもつ力と要するコストゆえに強力な国家や有力な社会集団の権力と結びつくのは、ほとんど不可避である」……



〒113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21
tel. 03-3814-0131 fax 03-3818-6435

みすず書房

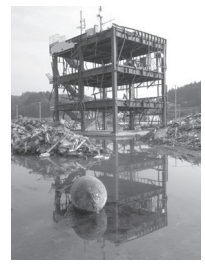
http://www.msz.co.jp（価格は税込です）
ニュースレター配信中．ウェブサイトよりお申し込みください

震災と建築、渾身のルポルタージュ

五十嵐太郎《被災地を歩きながら考えたこと》

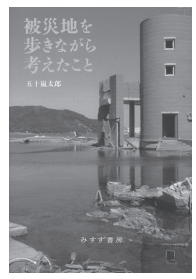
「被災地をまわりながら、大船渡のリアスホールや石巻の宮城県慶長使節船ミュージアムなど著名建築家が設計した文化施設が避難所として機能しているのを見て、非常時に建築が発揮した力に勇気づけられる場面もあった。しかし、ビルが横倒しになったらしいという断片的なニュースを聞いて訪れた宮城県の女川町で言葉を失った。八割の建物が被災し、カオスというべき無茶苦茶の風景である。呆然としながら、廃墟になった街を一時間ほど歩くと、だんだんと異常な壊れ方をしているビルの存在に気づく。四階建ての鉄筋コンクリート造や鉄骨のビルがゴロゴロ転がっている。こんなことが本当に起きるのか？　わが目を疑った。しかも隣に倒れているのではなく、水の力によってこれほど重い物体が場所を移動していたのだ。振動による液状化現象が起きたことで、地盤が緩くなったことから杭ごと引っこ抜かれ、津波で漂流した後、横倒しになり、基礎の部分がまる見えになったコンクリートの建物の姿は生涯忘れられないだろう」

（撮影著者、次段写真も）



はたして工学で街は救えたのか。復興はいかにあるべきか。津波の記憶はどのように語り継ぐべきなのか。「宮城と岩手の沿岸部を中心に、北は青森、南は千葉まで」各地の被災状況を丹念にたどりつつ、有名建築家や地元建築家の動向、そして福島県南相馬市の仮設住宅地でのみずからの研究室の取り組みなど東日本大震災発生から半年間の推移と展望を綴った渾身のルポルタージュ。図版多数収録。

［建築・思想］



（四六判・240頁・二五二〇円）

『アメリカのデモクラシー』を軸に

松本礼二《トクヴィルで考える》

『アメリカのデモクラシー』はじめ、フランスの歴史家アレクシ・ド・トクヴィル（一八〇五―五九）の人と思想と著作が、近年ますます注目されるようになっている。デモクラシー論と革命論、アメリカ観、米仏の比較、「民主的専制」の概念、宗教と政治の関連など、トクヴィルの政治思想の核心としてくり返し論じられてきた諸問題が新たなパースペクティヴに置かれて、再検討されつつある。それは、なぜなのか。

日本のトクヴィル研究の第一人者である著者は、ひとつは自ら翻訳を手がけた『アメリカのデモクラシー』および『アンシャン・レジームと革命』の読解を通して、つぎに伝記研究をはじめ書簡・資料を駆使しながらトクヴィルの人と時代に迫ることによって、さらに、一九八〇年代から現在にいたる世界中の数々のトクヴィル研究を分析することで、この問題に応えようとする。「平等が生む第一の情念は物欲であるという認識から、トクヴィルは万人の幸福追求は何人をも幸福に導かぬという洞察を導く。民主社会では万人が幸福を求めてやむことなく努力を重ねるが、誰一人として得られた幸福に満足しない」。正確なテキスト読解から現代の課題に挑んだ、思想史家の好著。

［政治思想・フランス史］

（四六判・280頁・三七八〇円）

「あたりまえの医療」とは

阿部惠一郎《精神医療過疎の町、名寄 最北のクリニックから》

二〇〇六年の春、著者は北海道名寄市でクリニックを開業した。日本最北の精神科クリニックである。名寄市を含む上川郡の北部には、精神科の病院は市立病院しかない。人口七万人を超える上川郡北部は、精神医療が極端に手薄な「精神医療過疎の町」だったのである。

これまで東京のクリニックでばかり診療をつづけてきた著者は、名寄での診察を通して、厳しい北国の現実を知る。膨大なうつ病患者、頻発する自殺、過疎による一人暮らしの高齢者の多さ、超少人数学級と子どもの発達障害……。著者がクリニックから目の当たりにしたのは、単に人口の減りゆく町の姿ではなく、医療や教育の機会にも見離された町の姿だった。

クリニック開設時、著者はパンフレットにこう書いた。「全国並みの、あたりまえの医療を提供したい」。あたりまえの娯楽や、人とのつながりまで奪われつつある町で、せめて「あたりまえの医療」を提供したい――そんな著者の想いはどこまで届くのか。精神医療過疎の町に生きる人々の姿を描く、静かな怒りに満ちた精神科医のエッセイ。

【一月下旬刊】

［医療・ノンフィクション］

（四六224頁・予価二六二五円）

描画解釈の新手法

ルネ・ストラ　阿部惠一郎訳《バウムテスト研究 いかにして統計的解釈にいたるか》

被検者の描いた木からその深層意識や内面を理解する、バウムテスト。特別な器具を必要としないため、本邦の心理臨床の現場においてももっともよく用いられる心理テストである。

本書は、フランスの小児医療心理センターでバウムテストの臨床と研究に従事してきた著者ルネ・ストラが遺した生涯唯一の本である。性格特性ごとに木の画に表れやすい特徴を一七八項目の「描画サイン」として抽出し、それぞれのサインの出現頻度を年齢ごと、性別ごとに導き出している。また、家族や兄弟との関係、食事や芸術への興味など、被検者の来歴と描画サインとの関連まで統計的処理をし、きわめて立体的な描画サインへと至ったのである。

男児 10 歳の描画

本邦では、長らくスイスの心理学者カール・コッホによるバウムテストが重用されてきた。しかし、ときとしてコッホの手法は描画の直観的で象徴的な解釈や、サインのあまりの多義性に批判も向けられている。本書はフランスの児童心理学の知見も踏まえた、バウムテストを初めてテストたらしめる良書である。

【十二月下旬刊】［臨床心理学］

（A5判・544頁・七九八〇円）

書き下ろしを含め青年論を集成

笠原嘉 臨床論集《再び「青年期」について》

青年期のこころはなぜこれほどにも揺れ、ときとして病いに接近するのであろうか。本書は一九七〇年代に「スチューデント・アパシー」と呼ばれる大学生に見られる特有の無気力症状に、いち早く着目した著者の青年期論を集成するものである。

収録論文は、著者が大学の保健管理センターに身をおいていた一九六八年から一九七二年の臨床経験が礎となっている。その間、わが国の大学と青年たちは異様な緊張に包まれていた。本書は学生運動という現象を間近にみた精神科医の青年期論という読み方もできよう。

かつて、青年を語ることは「成長」という概念に支えられていた。エリクソンやサリヴァンの発達心理学には年齢相応の発達課題があり、それを乗り越えることで青年は成長していくと考えられてきた。では二一世紀の青年には、果たして「成長」概念をそのままあてはめることができるだろうか？　時代を違えた本書の所収論文に通低しているのは、常に医師―患者関係が患者の心理的な成長を促し、治療へとつなげることを著者が目指していることである。七〇―八〇年代の主要論文を中心に、著者が初めてひきこもりとうつ病の関係を描いた書き下ろし論考「クリニックで診る青年の「ひきこもり症」」を加えた、熟達の精神科医による臨床論集第三弾。

［精神医学］

（四六判・224頁・三七八〇円）

▼笠原嘉臨床論集・既刊

『うつ病臨床のエッセンス』

先駆的論文に近年の著作を加えた必読書。（三七八〇円）

『外来精神医学という方法』

街角のクリニックからみた患者の姿と、新しい医学のありかたに迫る。（三七八〇円）

月刊雑誌《みすず》最近号より

タラル・アサド＋磯前順一「ムハンマド・アサドの回想より――震災後の社会の政治と宗教」、松尾尊兊「漱石と朝鮮」（10月号）。ヨアヒム・ラートカウ「ドイツ反原発運動小史」（11月号）。エヴァ・ホフマン「音楽と書くことと私」、若松英輔「いま、『生きがいについて』を読む」、藤山直樹「落語と精神分析　旦那は「生きて」いるのか――寝床」、坂上香「ライファーズ〈最終回〉」（12月号）。

連載は、小沢信男、大谷卓史、外岡秀俊、池内紀、田中眞澄、森まゆみ、宮田昇、高桑信一、佐々木幹郎、植田実、上村忠男。（各三一五円）

東日本大震災と原発をめぐって

『みすず』本年4月号より震災・原発関連記事を掲載中です。4月号に中井久夫「東日本巨大地震のテレビをみつつ」、5月号にジャーナリストの塩谷喜雄「福島原発、安全からの逃走の果てに」、6月号から五十嵐太郎「被災地を歩きながら考えたこと」（連載は10月号まで続き、このたび本紙面にご紹介する一書にまとめられました）、8月号に建築家の鈴木了二「建屋と瓦礫と」、9月号に批評家の若松英輔「協同する不可視な「隣人」」。10―12月号も上記のように継続掲載中。12月号巻末に、本年総目次を収載。

「読書アンケート」号と定期購読のご案内

月刊雑誌『みすず』次号は、「読書アンケート特集」掲載の1・2月合併号（二月一日発行）です。本年中にお読みになった中から五冊の書を、各界およそ一六〇名の方々にご回答いただき一挙掲載する恒例の特集号です。

本誌『みすず』は、原則として郵送による年間購読をお願いしていますが、「読書アンケート」特集号のみご希望の方は、切手四〇〇円分（送料込）をお送りください。発行次第お送りいたします。

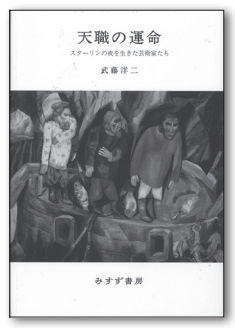
『みすず』は、一冊三一五円（税込）、一年間の購読料は三七八〇円（税・送料込）です。年間購読を新規にお申し込みの際は、購読開始の号を明記いただき「新規」とお書き添えのうえ、直接みすず書房営業部まで、郵便振替または切手でご送金ください。郵便振替の口座番号・加入者名は、「東京00100―9―195132　株式会社みすず書房」です。

「芸術では火の鳥だが，くらしのなかでは濡れたニワトリだというようなことはあり得ない」（パステルナーク）

武藤洋二
天職の運命
スターリンの夜を生きた芸術家たち

四六判　528 頁　6090 円

史上最大の国家権力の下，芸術家たちはどう生きたのか．
ソヴェトの負の歴史，とりわけこの時代の人間のありようは，ナチスの犯罪とくらべて明らかでないことが多い．本書は徹底した実録により，個人の生き方と国家の動きが奏でる《時代の音楽》を再現する．
多くは体制賛美者，小心な加害者，無数の保身者として生きのびようとした．だが人類の創作史は，人生の最悪の日々につくられた傑作をたくさん知っている．
演出家杉本良吉，ピアニストのユージナ，画家フィローノフ，演劇人ミホエルス．ネフスキイ，ショスタコーヴィチ，メイエルホリド，トロツキイ，パステルナーク．
碩学の長年の精華．交響曲のような一書．



鴻英良訳
イリヤ・カバコフ自伝　60年代―70年代、非公式の芸術　五六七〇円

アレックス・ロス　柿沼敏江訳
20世紀を語る音楽［全2巻］　①四二〇〇円　②三九九〇円

トニー・ジャット　森本醇・浅沼澄訳
ヨーロッパ戦後史［全2巻］　各六三〇〇円

A・リード／D・フィッシャー　根岸隆夫訳
ヒトラーとスターリン［全2巻］　各三九九〇円

ヴィクトル・ザスラフスキー　根岸隆夫訳
カチンの森　ポーランド指導階級の抹殺　二九四〇円

エドマンド・ウィルソン　岡本正明訳
フィンランド駅へ［全2巻］　各四七二五円

クルト・リース　八木浩・芦津丈夫訳
フルトヴェングラー　音楽と政治　三三六〇円

中村禎里
日本のルィセンコ論争　二三一〇円

〒113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21
tel. 03-3814-0131 fax 03-3818-6435
みすず書房
http://www.msz.co.jp（価格は税込です）
ニュースレター配信中．ウェブサイトよりお申し込みください

基本図書限定復刊

10月

一般システム理論

ベルタランフィ　サイバネティックスにつながる、無生物、生物、社会を貫く一般原理の同形性の根拠を究明。**長野・太田訳　￥4725**

量子力学の数学的基礎

ノイマン　コンピューターやゲーム理論の先駆者の主著。ヒルベルト空間論にて量子力学を基礎付ける。**井上・広重・恒藤訳　￥5250**

構造・安定性・ゆらぎ

グランスドルフ／プリゴジン　熱および流体力学における構造・安定性の問題を非平衡熱力学から統一的に概説。**松本・竹山訳￥7140**

角運動量の基礎理論

ローズ　角運動量理論の入門書。基礎理論から始め、原子物理学、核磁気共鳴、素粒子の相互作用へ応用する。**山内・森田訳　￥4410**

水の構造と物性

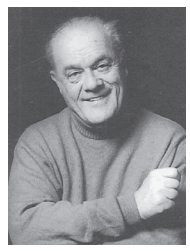
カウズマン／アイゼンバーグ　液体の水、水蒸気、氷、それぞれの特徴を物理学と化学の視点から体系的に説く。**関・松尾訳　￥7560**

繊細な感情表現から いかにして名曲が成り立つか

チャールズ・ローゼン
≪音楽と感情≫
朝倉和子訳

おなじ著者の『ピアノ・ノート』は二〇〇九年に刊行して大ヒット。現在10刷でロングセラーに仲間入りした。

今回は、ローゼンがこれまでに出してきた大著小著とは趣がちがって、一見途方にくれるようなテーマに鮮やかに切りこむ。バッハからアルバン・ベルクまで、クラシックの作曲家たちはどのようにして、聴き手の感情を波立たせたる美しい曲を作ったのか。


ローゼン

たとえばベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」最終楽章。最初に複雑なリズムのファンファーレ、次に一転して素朴なドイツ舞曲のリズム。この対照的な感情が徐々に小さな物語へと積みあがっていく。ところが著者によると、この方法は18世紀半ばまで存在せず、ベートーヴェンの死後は消滅して、別の方法が生まれたという。

心憎いほど音楽を知り尽くしたピアニスト・批評家が、古典派以前からロマン派以後まで、名曲がいかに繊細な感情表現から成り立つか、その秘密と変遷を具体的に語る。

「驚きなのは、緻密な分析と専門的なアプローチをしながら、みごとに感動的なことだ」（『ガーディアン』紙評）。

付録がまた愉しい。昨年雑誌「みすず」に紹介されて吉田秀和氏が絶賛した、ショパン生誕二百年を祝うエッセイと、さらに今年掲載のシューマン生誕二百年記念のエッセイ。【十二月下旬刊】［音楽］（四六判・200頁・二九四〇円）

一次資料による画期的な現代史

中根良平・江沢洋他編《仁科芳雄往復書簡集　補巻　現代物理学の開拓 1925–1993》

仁科芳雄発／着の往復書簡を中心に、関連文書を数多く収めた『仁科芳雄往復書簡集』（全3巻、二〇〇六／〇七）は、二十世紀物理学の国内外の研究現場の様相を生き生きとかつ多面的に伝える、類のないものとなった。さらに理研の「二号」（原爆）研究や広島・長崎をめぐる調査や考察、米占領下の日本で戦後世界を見据えてゆく数々の書簡・文書は、現代史資料としてきわめて貴重であり、科学者と戦争、国家と時代と科学のあり方を考えるうえで、つねに振り返るべき証拠である。

この補巻は『書簡集』全3巻刊行後に発見された書簡・文書・資料など四九〇点から成る。シュレディンガーやパウリの講義を聞いた仁科の一九二〇年代のノート、ディラック宛ての書簡にはじまり、宇宙線の研究、対称核分裂、そして「大サイクロトロン日誌」などサイクロトロン建設をめぐる一連の書簡・文書は、当時の日本の科学の最前線の姿を鮮やかに映し出している。

とりわけこの補巻の特徴となるのは、日本の原爆開発の一端をしるす仁科芳雄・矢崎為一「核分裂によるエネルギーの利用」（一九四三）や、「トルーマン声明」など広島・長崎への原爆投下と敗戦前後の「敵性情報」に関する文書、一九四五年八月九日から翌年三月にいたる「仁科芳雄のノート」などであろう。これらは原爆と「終戦」をめぐる第一級の資料であり、今にいたる原子力問題のあり方の全貌も、ほぼ出揃っている。

日本科学史学会学会賞特別賞を受けた『全3巻』も重版。中根良平・仁科雄一郎・仁科浩二郎・矢崎裕二・江沢洋編［物理学・科学史・現代史］（A5判696頁・一六八〇〇円）

南部から見た六〇―七〇年代

中島和子《黒人の政治参加と第三世紀アメリカの出発　新版》

「結局、南部へ行くことへの反対は、アメリカ社会のタブーに触れることに対する反対で、つきつめて言えば、「黒人問題はアメリカの恥部だから見てもらいたくない」であった。

この、反対のエッセンスに触れたとき、私は非常に心外に思い、何とかその誤解を解こうと必死の努力を試みた。つまり私は黒人運動に対してアメリカ人と異なった見方をしており、重箱の隅をほじくるような気持は微塵もないこと、むしろ黒人解放運動のなかに将来アメリカ民主主義を推進してゆくべき輝かしい歴史的役割を見出しているのだということを説明しようとした。」

アメリカの真の民主主義とは？　留学中に、黒人運動に触発されて研究を始めた著者の集大成。R・F・ウィリアムズの黒人運動と日本における救援活動、キング牧師の非暴力闘争と黒人社会におけるキリスト教、南部出身初の大統領となったカーター政権誕生の歴史的意味…　黒人の政治参加および南部に視点をおいた、六〇―七〇年代アメリカの政治動向の分析。類のない業績で評価された中央大学出版部刊（一九八九年）の新版。『アメリカ現代史・政治学］（A5判・496頁・六五一〇円）

▼『仁科芳雄往復書簡集――現代物理学の開拓』［全3巻］
Ⅰ　コペンハーゲン時代と理化学研究所・初期 1919–1935（440頁・一五七五〇円）
Ⅱ　宇宙線・小サイクロトロン・中間子 1936–1939（496頁・一五七五〇円）
Ⅲ　大サイクロトロン・二号研究・戦後の再出発 1940–1951（792頁・一八九〇〇円）

▼『仁科芳雄――日本の原子科学の曙』玉木英彦・江沢洋編［一九九二年刊、新装版二〇〇五年］（三九九〇円）

みすず書房・最近の重版より

知の広場――図書館と自由	
A. アンニョリ　萱野有美訳	￥2940
他者の苦しみへの責任	
A. クラインマン他　坂川訳　池澤解説	￥3570
福島の原発事故をめぐって	
山本義隆	￥1050
現代精神医学原論	
N. ガミー　村井俊哉訳	￥7770
環状島＝トラウマの地政学	
宮地尚子	￥2940
カチンの森――ポーランド指導階級の抹殺	
V. ザスラフスキー　根岸隆夫訳	￥2940
よくできた女　文学シリーズ lettres	
B. ピム　芦津かおり訳	￥3150
ピアノ・ノート――演奏家と聴き手のために	
Ch. ローゼン　朝倉和子訳	￥3360
映画もまた編集である――W・マーチとの対話	
M. オンダーチェ　吉田俊太郎訳	￥4830
テクノロジーとイノベーション	
W. B. アーサー　有賀裕二監修　日暮雅通訳	￥3885

みすず書房 営業部だより

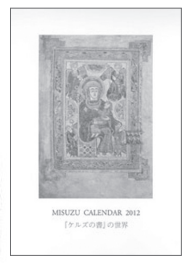
本紙四・五面で大きくご紹介しますように、みすず書房の看板シリーズ「大人の本棚」が十周年を迎えました。『素白先生の散歩』『小津安二郎「東京物語」ほか』の二点でスタートした企画は、幅広いジャンルをカバーすることで多くの読者のみなさまから支持を得ることができました。

今年は新シリーズ「始まりの本」も刊行を開始しました。人文書ロングセラーの再提示は、小社刊行書の中核をなす企画でもあります。十歳になる「大人の本棚」、産声をあげたばかりの「始まりの本」、今後も大事に育てていきたいと思います。

東日本大震災被災地の書店店主の方の話を聞く機会がありました。震災以来しばらくぶりに営業を再開した際、書籍や雑誌を求める多くの読者が駆け込んで来て驚いたと話されていました。本がもつ潜在的な力を再認識すると同時に、大変勇気づけられました。

来年もご期待に添える出版を続けてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

みすず 美術カレンダー 2012



来年の美術カレンダーは、特集「『ケルズの書』の世界」です。八―九世紀にアイルランド東部のケルズ修道院内で作製されたという、ラテン語の「福音書」写本。羊皮紙に美しいカリグラフィーと人や動物の意匠が施され、古今東西のビブリオフィルたちを魅了してきました。八点を収め、卓上用、ハガキ大、ペーパーケース入。一部六〇〇円に送料八〇円、計六八〇円分の切手を同封し、小社営業部まで、どうぞお早めにお申し込みください（〒113―0033 文京区本郷5―32―21）。

みすず書房 図書目録 2012年版　出来

毎年この時期に作製している総合図書目録ができあがりました。ロングセラーはもちろん最近の復刊書、オンデマンド版、新シリーズや本年12月の最新刊まで、現在在庫のある一〇〇〇点をジャンル別にご紹介しています。ご活用いただければ幸いです。添付のハガキでご請求ください。